言いたいほうだい

沼津文学祭

四方一渉

日本中を沸かした甲子園の高校野球が終宴を迎えると、一気に秋が訪れる。最近では中学・高校とも運動部全盛で、文化部は、いずこも低調という声を聞く。喜ばしさと寂しさが交錯する。

かつて若者は草に寝転び、流れる雲を見つめて、自らの人生に思いを馳せ、哲学に自らの生き方を思索した。それは遠い過去の時代の一こまであろうか。

井上靖は、狩野川の草むらに、千本浜の海浜に友と語らい、自らの生き方をまさぐった。そしてそれは大樹となって、人々の美への憧れと心と知の安らぎを育んだ。

沼津の風土は美しい。その景観と気温と豊かさは比類がない。

かつてユネスコ局長を務められた平塚益徳氏が私に話してくださったことがある。「私は世界中の国々を回り、美しい風光に接してきたが、あのスイスのジュネーブにも優る沼津周辺の景観と風土は世界屈指のものである」と。

この沼津の景観と風土は沼津の人の思索と美意識を高度に内実せずにはおかない。それは文学を生み出し、人を人として生かす天恵の環境である。

井上靖が文学への意識を育み、人生に思いを致すに至った地が沼津であり、太宰治が文学に開眼したのが沼津であることも不思議ではない。

沼津と文学と言えば井上、芹沢光治良、牧水、海人が挙げられるが、沼津が育んだ文人は、それに限るものではない。西周、渡辺白泉、村山知義、佐々木邦、川村晃、大岡信…列挙にいとまがない。

このたび沼津市では、「沼津文学祭」を開催することになった。本年は牧水に焦点を当てて様々な催しを行うことになった。しかし、それはただに牧水や靖の顕彰ではない。

市民、わけても小中学生・高校生らの参加をまって、次の世代に生きる若い人達に文学を通して、自分について、人間について、そして自分達の住む沼津について考えてもらうことを一つの柱とするまちおこしである。決して特定の文学者、文人の顕彰を意図するものではない。

沼津には文人が輩出したというが、その人達は沼津を「終（つい）の住処」としただろうか。沼津で生を終わったのは牧水と白泉だけである。

沼津は育む空間ではあっても、人々をつなぎ止めるものを持っていない。沼津には、人々を安らぎと、そこに定住して自らを高めるための何かが欠けている。これは「沼津」の精神的風土と深く関わっている。

「沼津文学祭」は、文人を手がかりとして市民総ぐるみで考え、皆で「沼津」を育む営みである。それは数年のイベントでなしうるものではなく、長い歳月をかけて作り上げていく市民活動である。

多彩な企画が企てられている。参加を心より願う次第である。

（沼津文学祭実行委員長、松下町）